

なりたい職業

うちだ ふみこ
内田 文子 ●電機連合 中央執行委員

今年3月にある新聞記事で「なりたい職業、会社員が1位、親の在宅勤務影響か」との見出しがあり、気になったのでこの調査について調べてみました。

この調査は、第一生命保険が1989年より毎年、全国の児童・生徒（保育園・幼稚園および小学1～6年生）を対象に「大人になったらなりたいもの」としてアンケートを行ってきたもので、第32回となる2020年は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、訪問回収からインターネットアンケートに調査方法を変更し、あわせてアンケート対象を幼児・児童から小学3年生～6年生・中学生・高校生へと変更したということです。（合計3,000人に調査）

結果は、小学生の女子の1位が「パティシエ」でしたが、ほかは男子の小中高生、女子の中高生のいずれも「会社員」がトップでした。加えるなら小学生の女子の4位も「会社員」でした。同社は「会社員」の人気の高い背景について「コロナ禍で在宅勤務が広がり、親の働く姿を身近にみるようになったこともある」と分析しています。調査対象者は違うものの「会社員」との回答は、調査が始まった1989～91年のバブル期に「サラリーマン」が9位になって以来のようです。

ふと、うちの子どもたちが保育園時代に七夕の短冊に「サラリーマンになりたい」「お母さんの会社で働きたい」と書いていたことを思い出しました。保育園児ながらもなんて現実的なんだろうと思いましたが、とてもうれしかったことを覚えています。

当時私は支部の非専従執行委員で、会社業務に加え、週末には研修やイベントなどもあり、子どもたちには少しさみしい思いをさせていた

と思います。そういうこともあり、家族が参加できる組合イベントには積極的に子どもたちを参加させていました。

参加したイベントの中でも「会社の地域開放イベント」（労使共催）は、レンジャーショーや抽選会、他にもたくさんのイベントがあり、とても楽しかったようで、毎年楽しみにしていました。子どもたちにとっては「お母さんの仕事はイベント関係で、会社は楽しいところだ」と思っていたのかもしれませんが。

そんな子どもたちも年齢とともに行動範囲も広がり、他の楽しみも増えたことで、小学校を卒業するころには「サラリーマン」や「お母さんの会社で働きたい」とは言わなくなっていました。これはこれで少しさみしい気もしました。

今年高校2年生になった上の子に、「なりたい職業」について聞いてみましたが「特にない」との回答。「いずれは働くんだよね」と聞くと「それはそうでしょう」と何かしら働く気があることがわかり少し安心しました。

考えてみたら、私自身も小学生の頃はなんとなく「学校の先生になりたい」と思っていたのですが、高校生の頃には「特にこれをやりたい」というものはなかったです。それでも大学生になると何か資格や免許を持っていた方がいいのではないかと思い、教育実習もやり教員免許を取得しましたが、結局教師にはならず、今の会社に就職し、気がつけば労働組合の役員をやっているのですから、人生どうなるかは分かりませんよね。

子どもたちには、どんな職業であれ、少しでも働くということにちゃんと向き合ってくれるように、さまざまな場面や自分自身の行動でも思いを伝えていきたいと思います。